113

431
27

重光葵論
戰時外相への注文

北
著

特251
95

東京情報社

㊟十五錢

1

0010118000

0010118-000

特２５１－９５

重光葵論

城北散史・著

東京情報社

昭和１８

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

特251
95

帝國圖書館藏

城北散史著

重光葵論

東京情報社

帝國圖書館藏

目次

一、外相として登場……三
二、彼の閲歴……五
三、駐英大使……一〇
四、戰時の外相……一四
五、我等の注文……二四

一、外相として登場

東條内閣は、第八十一議會で、少しは、あれ、これの批評はあつた。そして、議員の推選制を、今後採用せぬ、と聲明してゐる。

だが、戰時内閣であるから、今時、動搖のあるとは、思はれず、その上、内閣の改造なども一般國民の豫期せぬ所、從つて、青天の霹靂とも云へる改造であつた。

人事と云ふものは、一使用人、一給仕の採用、罷免でも、仲々容易なものではなく、意外な波瀾を起すことなしとせぬ。況んや、一國、最高政治機構である内閣の閣員改造とあつては、蓋し、外部の豫想の外だと看るのは穴勝、不當であるまい。爾來、内閣の改造は、命とりだと云はれたのは、這般の消息を、最も、よく形容したものかも知れない。

然るに、その困難視された内閣の改造を、電光石火的に行ふたのは、如何に、戰時下とは云

へ、東條式を發揮した大なる動きであつた。

この內閣改造に當つて、翼賛會の副總裁たる安藤紀三郎中將の內相、山崎達之輔氏の農林大臣、大麻唯男氏の國務大臣などは、夫々の意味で改造の意義を表現し、必ずしも不可はない。殊に、山崎、大麻の兩氏を衆議院から採り、少し遲れて、補充された岸和田の藩主岡部長景子を貴族院から拉し、以つて、兩院の代表的形となし、議會と政府の連絡に當らしめることは、慥によき意味での改造である。

其他、新閣員の個々に就て語るならば、必ずしも、その材料、所感の少なきを憂へぬ。されど、こゝでは、そは暫く別として、この改造で、注目のひく一人は、戰時の外相として、久しく待望された重光葵氏が、颯爽として、國民喝采の中に、霞ヶ關の主人公、卽ち、新外相として登場したことは、空前の世界大動亂の眞たゞ中なるが故に、殊更に、重大注目を浴びるに到つた。

又、それ程でないとする人があつても、決して輕視して雲煙と看逃がせぬ現狀である。就て

少しく、外相としての重光、人物としての重光、併せて、戰時外相の困難性も附加し、聊か、讀者に訴へんとする。

二、彼の閲歷

さて、戰時外交の擔當者となつた重光氏はどんな經歷の人であるか、その閲歷から、書かして貰ふ。

出身は、九州大分縣、杵築町の中學出、その時代から、首席の秀才で、第五高等學校から、東京帝大に進み、明治四十四年に卒業してゐる。

外交官を志願したのは、どんな動機であつたかは知らんが、大學を終ると外交官試驗に應じ當時は、あをり人數も多くはないが、その中の首席で及第した。

以前に、外務次官をしたり、駐米大使にもなつた堀內謙介、代議士芦田均の兩氏は、同時に

外交官試驗を受けた仲間である。

堀内氏も、一寸世間から忘れられ、芦田氏は、代議士として、外交通として、忘れられたとは云はぬが、七、八年も前に、ジャパンタイムス社長、報知新聞論説委員、代議士、其の他何々と云ふて、ラジオのニュース解説の外交、國際關係の放送者として、有名であり、もしくは好評嘖々であつた時代と比較すると、どんな理由か知らんが、新聞方面の關係もないし、ラジオにも、一向顔出さん、代議士ではあるが、別に大したことはきかん。

こんな有樣であるのに、重光氏は、逸材であつたとは云へ、駐英大使から、駐支大使、更に新外相として登場したのだから、先づ、同僚の中でもよい方である。

外交官としては、どんな經歷を踏んでゐるかと云ふと、獨大使館勤務、それから、第一次大戰の媾和條約を結んだヴエルサイユ會議の隨員として、空前の國際會議の經驗に參加し、外交官としての榮譽と箔をつけ、その後、別に大して特記することもないが、世間的に知られる樣になつたのは、例の昭和七年四月、駐支大使として支那事變に活躍してた時、四月二十九日天

長節祝賀會場で、時の上海派遣軍の司令官白川大將、駐米大使として、大東亞戰前の外交を擔任した、時の支那派遣艦隊司令官野村吉三郎大將——當時中將——其他の人々と、爆彈の爲めに、死線にさまよつた時からである。

我々も、それ迄は、重光氏の存在は知らなかつた。こうした一事件で知られた氏は、からくも一命をとりとめ、その後、トン〳〵拍子で、今日に到つた。

駐支公使として遭難してから、間もなく、內田康哉伯の下に、外務次官に拔擢された。

當時、重光氏の眞價も知らず、實力も知らぬから、次官任命は、先の氣の毒な、上海事件の埋め合せであるまいかと思つたものである。

少し話は餘談になるが、この上海から歸つて、次官になつた頃のことで、思ひ出されるのは朝日講堂の講演會である。

當時、朝日講堂では、時々、時の人々をよんで、講演會を開催して、一面、營業廣告か知らんが、仲々盛大にやつてゐた。

朝日新聞は、爾來、外交方面には、他の新聞よりも、注意し、ニュースも、他の追隨を許さなかつたが、こんな理由からか、外交方面に拔目がないので、當時、滿洲事變から國際聯盟の脫退となつて、ジネーブの聯盟本部、政治部次長として、英のドラントと共に、相當、もしくは相當以上に活躍した杉村陽太郎氏が、歸朝してゐたので、この杉村氏と、新次官となつてこれも歸朝した重光氏が、最近の報告をかねて、この講堂に立つた。

その時の印象は、杉村氏の雄辯宏辭があまり大きいので、重光氏のかげが、よほど小さく見えた。

杉村氏は、其後、駐英大使の噂さへあつた位で、これは實現しなかつたが、間もなく、駐伊大使となり、更に駐佛大使となつたが、天、この偉大なとも申したき、得難い外交官に、天壽を與へず、早く病を得て、逝去されたのは、甚だ哀悼にたえなかつた。

だが、氏は、六尺豐かの巨人、法學博士の肩書の示す如くに、學は廣く、識は高く、稀れなる外交界の逸材と云ふも、必ずしも、過ぎた讃辭でないかも知れぬ。

重光氏は、杉村氏よりも後輩でもあつたし、體格、雄辯で、人を魅する力も少ない。それで前述の如く、多分、上海事件の論功行賞の意味で、同情的に次官となつたでないかと失敬にも考へたものである。

以上は、さつと、一昔し前のことだが、これは挿話として、こんなにも看られた重光氏は、その後、廣田外相の下にも次官として勤め、更に、ソ聯大使となつて、昭和十二年に乾盃子と張鼓峰の困難な事件を處理してその存在を示した。

重光氏が、ソ聯大使となつた頃は、所謂、防共協定が日獨間に締結された直後で、日ソの關係が、極めて惡い時であつたから、重光氏は、さながら敵地に赴任した感があつた。

然るに、さまで日ソの國交を阻害せずにすんだのは、多としてよい。

それから、日ソ國交の成績に依るのか、どうか知らぬが、昭和十三年、あまり評判のよくなかつた吉田大使の後をうけて、駐英大使に任ぜられ、在任滿二ケ年ロンドン大爆擊を體驗して十六年七月、當時の英傑外相松岡洋右氏の訓令で歸京、同年十二月、本多熊太郎大使の後任と

して、中華民國の大使となり、更に今回の改造内閣に外相となつた。

三、駐英大使

大分長くなつたが、駐英大使に就て少し書き加へて置きたい。

重光氏が、駐英大使となつたのは、前記通り、昭和十三年で、氏の齢五十二歳であつた。

その當時、五十二歳の駐英大使は、先づ、日本の駐英大使としては、最も若い一人である。

爾來、駐英大使なるものは、日本の遣外使臣の最上席であつた。

このことで、くど〳〵と記述するのも、外交界に精通した讀者には、おこがましいが、明治時代には、外務大臣となつた人とか、又は、これと同等の人物のみが、その任に當つた。

重光氏の如く僅かに次官、駐ソ大使の經歷の外ない、謂はば少壯の大使は見られなかつた。

前の駐米大使吉田茂氏にしても、伊太利の大使となり、次に、廣田内閣成立の時には、外相の候補となり、新聞の辭令を受けた人で、牧野伸顯伯の婿、即ち、維新の元勳、大久保利通侯の孫婿に當る人、その前は、松平恒雄氏で、今の宮相で、秩父宮妃殿下の父君、外交界の雄物であつた。

その他、駐英大使たりし人々を數へ上ぐれば、小村壽太郎、加藤高明、林薫、珍田捨己、林權助、松井慶四郎、井上勝之助侯等で、皆、一國の重きに任じた人々である。

こうして駐英大使が重ぜられたのは、日英同盟があり、且つ、英國が、日の下開山の横綱國として、地つかずの相撲であつたからである。

ともかく、英國の外交界に於ける下り坂とは云へ、若冠五十二歳で、駐英大使として乘り込んだのだから、重光氏たるもの光榮であつたと云ふべきである。

只、氏が、駐英大使時代は、歐洲の大戰で、日本としても、極めてデリケートな時代であつたので、氏の外交功績を明に云々する時に、未だ到達せずであるから、その論評は出來ない。

たゞ、同氏は、外交官としては、極めて、順當に進んだことを一言して置く、尙、序でに書

き加へるならば、氏の外相登場が、時期を得たと云ふことである。

然し、時期を得たと云ふたからとて、一客觀的のことで、主觀的、本質的に見てはどんなかは、別とする。

然らば、どんな意味で、時期を得たかと言ふと、重光氏は、外相たる機會は、隨分とあつたかに云はれた。こゝ五、六年、外相の更迭毎に、いつでもと云ふてよい位、その候補と紙上に書かれた。

最初に、外相候補となつたのは、駐英大使となつてから間もない頃である。然し、重光氏はうけなかつた。その上、今迄幾回も〳〵も、候補と噂されたから、本人の希望があれば、もう少し早く、外相たりしやも未だ知るべからずである。それを受けぬ所に、却つて重光氏の重用性と怜悧性とを含む。

一體、外相なる地位は、外交官として霞ケ關に入つた人々の最高的に望む地位である。明治は、勿論だが、昭和の初め迄は、仲々によい地位であつた。

だが、最近、支那事變となつてからは、內閣の壽命が半年位になつたから、その度に、外相が替るとなつては、霞ケ關育ちとして第一線にある人では、一寸躊躇する。

何故となれば、外相となつても、一度內閣が變れば、浪人生活に這入る心配がある。よくて貴族院の勅選議員で、更に、遣外の使臣として、大使になると云ふことも望まれ難くなつた。

その時、重光氏の如きは、漸く駐英大使として、遣外使臣の第一人者となつたのみである。そして、その地位も、內閣に於ける外相よりは、遙かに確實性がある。生半可に、外相となつて、霞ケ關出の浪人となるよりは、安全な駐英大使の地位をたのしむ方がよい。重光氏は、どんな考へで、外相を、辭退したか知らぬが、吾人の批評に依ると、悧巧な方法であつた。

そして、ゆつくりと、駐英大使、駐支大使と經驗して、一寸國民の待ち兼ねた今時、喝采裡に、スタートして舞臺にあらはれたのだから、人生の遊泳術からしても、蓋し及第である。

まあ、あれこれと述べ過ぎたが、重光氏は、今戰時の外相として登場したのだから、平和の外相とは、異る重責がある。それで、同氏を語る一面、戰時外相に關する所懷を述べて一班を

加へて置きたい。

四、戰時の外相

戰時外相、それは文字の示す如く、一國が國運を賭して、敵國と戰鬪半にあるときの外務大臣のことで、その重大な職責は、總理大臣に次ぐとも云へる。勿論、軍部の首腦の如き戰そのものに重責を擔ふのは別として、文官としてゞある。

然らば、戰時外相としては、どんな人があるかと云ふと、世界は古く、且つ廣いから、古今の東西には、いろ〳〵な外相はある。支那の戰國時代には、藺相如（リンソウジョ）の如き、外交的の功臣もあつたが、そんな遠い所を尋ねなくとも、手近の我が國にも、戰時の外相は居る。

そは何人かと云ふと、日清の戰に陸奥宗光伯、日露の戰に小村壽太郎侯である。

歐洲の近世にとるならば、獨逸統一の戰時外交を握つたビスマーク——外相ではないが宰相

として外交の實權を握つてゐたから、外交の責任者と云へる——第一次大戰時の獨逸のフオンヤーゴー、英のサー・エトワード・グレー、などがゐる。

それから近世支那では、李鴻章の如きも、外相と云ふ名目ではないが、戰時の外交を牛耳つてゐた。

× × × × ×

戰時の外相なるものは、その國を國際的に有利ならしめ、自國を戰勝に導き、且つ、潮時を見て、手際よく戰を終結せしむるものであるならば、ビスマーク、陸奥、小村の如きは、先づ成功した戰時外相、又は、その責任者と云ふてよい。

たゞこゝに、一言して置かなければならぬことは、戰時の外相だからと云ふて、何でも彼でも外相一人で決するのではない。

勿論、戰時外相の手腕が、その交戰國の運命に重大な關係のあるのは、事實だが、その一個

人たる外相に、何もかも責任を押しつけるのは誤である。

何故となれば、今や、國策なるものは、九重の奥深き所は、暫く別として、一國の基本政策は、首相の下に、各閣僚あり、その閣議で決定するのが、普通である。尤も、國家の存亡に拘る様な、例へば、大戰の前夜の如きは、首相以下重臣、軍部に依る御前會議もある。

こんな次第で、外相その人の自由意志で決するものとは云へない。だが、當面の責任者として、一重要な役者であることは、間違ひなく、從つて平凡な外相よりは、有能果敢な外相が優れてゐることは申迄ない。

近世に、戰時の外相として華々しい功績を擧げたと云ふ人は少ない。先に擧げたビスマークの如きは、戰時外交の責任者としては、極めて鮮かな成績をあげたが、こは、外相としてよりは首相として行はれたもので、云はゞ首相でありながら、外相の仕事を兼ねたのである。

こうした首相が、外交迄も行ふことはあり得る。英のグラットストーンにしても、ヂスレリーにしても、國策としての外交を自ら指導した。奈翁三世も亦、外交は自ら行へ、獨のカイゼル、ウルヘルム二世も、第一次大戰頃は、自ら、外交を行つた。

我が國でも、日清戰後の伊藤首相、日露戰役の桂首相の如きも、亦、外交に關係した。殊に桂は、それ程でないが、日清役の首相、伊藤博文は、自ら文明政治家を以つて任じ、國際的政治家として、東洋のビスマークとも云へる人であるから、陸奥外交の外に、伊藤の頭から割り出された外交のあつたことを無視することは出來ない。

だが、日清役を中心とした、國家興亡の危險な外交は、陸奥その人の力による事多く、即ち日清の開戰に、小村を駐支代理公使に、起用し、三國干渉に、舞子の濱の病床にありながら、近世世界外交の經緯を考へつゝ、これに善處して、遼東は還附しても、日清の戰果を全ふすると云ふた頗るきはどい藝當は、陸奥ならでは出來ない。

彼は、今も尚、霞ケ關外務省の關頭に、颯爽として偉風を殘して居る。

次に、日露戰時の外相小村壽太郎侯であるが、侯の足跡も亦巨大なりと云ふべく、外交界の信夫淳平博士は、小村の戰時外交を評して、

「帝國外政の舵機を操縱するの責任を擔へる小村は、既往半歲之に就て苦心に苦心を重ねた。而して彼は隱忍冷靜の間に內は國論の歸嚮を統一し、外は列國の同情を我が國に傾到せしめ、內外の對露反感の高潮に乘じて斷然纜を絕ちて激浪怒濤の間に驀進せる、その細心と大膽とは言ふまでもなく、愈〻戰時外交に入りて、彼の第三國に對する進退動作の如き、人巧盡きて殆んど神技に類せるものがある」

と述べたのは、稍々過賞の嫌なきにしもあらずだが、必ずしも大過はない。

× × ×

然し、陸奥にしても、小村にしても、兩人とも、明治の中頃から末葉の外交家であつたから必ずしも、規則的の外交官生活の人ではない。

今の霞ケ關外交官なるもの〻常道的型は、帝國大學を出て、それから在學中もしくは卒業と同時に、外交官試驗に及第して、愈〻、外交官補として、霞ケ關の陣營に這入るのである。それから事務官、書記官、大公使となり、更に優秀の人々は、次官となり大臣となるのである。

× × ×

現在の代表者を求めて看ると、石井菊次郎子、松井慶四郎男、幣原喜重郎男、廣田弘毅、有田八郎と云ふ人々は、その代表である。

だが、陸奥とか小村は、必ずしも、こんな經路を經てゐない。尤も、彼等の時代には、外交官試驗採用も、今時のような規定はない。

それで、陸奥の如きは、必ずしも外交官出でなく、政治屋の出身で、ある時は政治犯として北國の雪國、山形、仙臺の獄舍の生活をやつたりしたもので、外交官生活に入り、戰時外交の擔任者となつたのは、その知友、伊藤博文に負ふ所大であつた。常道的の一外交官ではない。

小村はどうかと云へば、彼は、今の帝大の前身たる大學南校の出身であるから、帝大出身と云へぬことはない。それから、渡米してハアバート大學に學び、歸朝すると裁判官として、大阪に勤めたこともある。

然るに、その裁判官も、あまり評判がよくないのか、自分が好まぬのか、早く辭職して、外

務省に、漸く、入つたような譯けであつた。

這入つた後も、古いフロックコート一枚で、十年も飜譯室にくすぶつたと云ふから、輝かしい前途とか云はれた青年外交官でなかつた。

こうした、變な經歴の二人が、日本外交史上の大きな足跡を殘したのだから、人の運命も數寄のものである。

第一次歐洲大戰の獨逸の首相はベートマン・ホウルウヰヒであつて、外相はヤーゴーであるが、戰時外交の擔任者としては、四方八方に敵をもうけ、五年の後に和を乞ふたのだから義理にも卓越したと云へぬ。

だが、一寸つけ加へて置くが、當時の獨逸の外交の中心は、必ずしも、戰時の首相、外相の肩になくて、實に、皇帝カイゼルにあつた。それで、戰時外交家としてのカイゼルに一言するのも面白いが、帝は既に、オランダに崩じて年もあるし、こゝには論ぜぬ。

その代りに、當時、獨逸の敵國英國の外相グレーに就て附け加へる。

グレーは、「二十五年間外交の回顧」と云ふ本を殘して、可なり詳しく、彼の外交を語つてゐる。

彼の外務大臣は、隨分と長いもので、一九〇五年から一九一六年迄、十一年間に亘つた。その間、世界外交界の中心、ロンドンの外相であつたから、その威望は必ずしも小なりと云へぬ。從つて、第一次大戰の責任者として問はるゝ立場である。

今、當時の外交關係を詳述して、彼の外交を批判することは、繁雜で出來ないが、巷間の話では、グレーの外交が、まづかつたから第一次歐洲戰が起つた原因であるとも云ふ。

その理由は、

「獨逸は、ベルギーの中立侵犯で、英國は佛露側に立つとは思はなかつた。それに、外相グレーが、英の態度を明にせぬので、よもや、英國立つことあるまじとして、獨逸は、中立を侵して、白國侵入を企てた。

所が、英國は、その中立侵入を默視する能ははずとして、遂に、佛露側に立つに至つた。

故に、グレーにして、英國が、最初から、ベルギーの中立侵犯せば、英國の參戰止むなきを強調せば、第一次の大戰は、起らずにすんだかも知れぬ、卽ち、カイゼル治下の獨逸が如何に強盛でも、露佛英の三國を敵として戰ふを欲せぬからと云ふのである」

こうして、グレーにのみ、開戰の責任を負はせるのは、酷に失するが、戰防止の重責にあるグレーの態度が、必ずしも、適任とは云へぬと云ふ非難である。

その非難の當否は、こゝで云々はやめて置くが、グレーが、開戰後協商の連絡も、先づよく米國の援助も得たのだから、戰勝國の外相として、必ずしも、非難すべきであるまい。

序でゝあるから、參戰の外交と云ふことで少しく加へて置く、日淸戰役前に、開戰するか、せぬかと云ふことで、議論の多かつたことは、前述の伊藤首相と川上參謀次長との論議でも解るが、容易のことでなかつた。勿論强大視された淸朝支那國と、國を賭する戰で、三千年の歷史にもない大冒險であるから無理はない。

日露大戰前の重臣、閣員の議論の眞劍なことは、想像以上で、その採決すら難く漸く、聖斷を仰いだ程である。

筆頭の元老たる伊藤公は、戰となれば、自分も一兵卒となつて戰場に働く、と悲愴な心境を語つたのも此時である。

尾崎行雄氏の話であつたと思ふが、

大正四年、卽ち、第一次大戰の折に、日本が、協商側に立ちて、參戰するかせぬかと云ふ時に、當時の首相であつた大隈侯の早稻田私邸で、閣議が開かれたが、夜を徹るす程に議論が戰はされ、外相は加藤高明伯であつたが、實に、開戰前夜の苦心はたゞならぬものだと語つた。

歐洲大戰參加の如きは、今から見れば、何んのことない。勝いくさの仲間入りの樣に思はれるが、それで、この位であるから、日淸、日露の眞劍さは、どんなものか、思ひ半に過ぐるものである。

尤も、第一次歐洲大戰の參戰も、極めて、初期であるから、獨墺が勝つか、英佛露が敗れか未だ確たることは一寸言ひぬ時であつたから、日本の參戰も、重大視したらしく、そこには、

それ相當の理由もあるが、ともかく、開戰と云ふのは、どんなに苦心するかゞ解る。

從つて、その當面の責任者たる外務大臣の心境に到つては、蓋し、戰場にある軍司令官のそれの如きかも知れない。

話は、意外に手間取つて、本筋を忘却したが、戰時外相に關する物語りは、これ位にして、再び、本論に這入る。

五、我等の注文

さて、色々と道草を喰つたが、最後に、我々は、この多事多端な戰時外交の舵取りとなつた重光氏に、少しく注文を並べて、この小冊子を終りたい。

× × ×

× × ×

世人は、重光氏の登場に對して、好感以上のものを持つてはゐるが、然らば、何を彼に期待するか、と云ふと、先づ、

「うまくやつて貰ふ」

位のことで、これ、これと云ふ風に、箇條書、又は、具體的希望は上げられまい。筆者の如きもそうである。

前にも觸れたが、外相になつたからとて、何から何迄、外交は自分でやると云ふものでなく國策の根本もきまつてゐるし、そう飛び離れた藝當は出來まい。從つて、大きな注文をしたり無理な期待をするのは、する方の間違ひである。

と云ふて、外相個人の力を無視すると云ふことは出來ない。陸奥、小村の戰時外相としての效績は、そうであつたし、最近では、彼の松岡洋右氏の外相の如きは、先づ、思ひ切つて、個人的色彩を表現した。

こんな譯けで重光氏の如き、待望された外相には、多少の希望をかけゐるのも、無理ではある

まいが具體的には云へぬ。

だが、これは、我々國民の方の見方だが、彼、重光氏は、どんな抱負で新外相となつたか。何んでも、就任の直後、ラジオで、その一端を述べたが、只今、筆者の記憶には、失禮だがない。

然し、彼の抱負として傳へらるゝ所はある。それに依ると、

一、わが外交方針は、不動の國策に沿つて、何等變更を見ぬ。

二、中華民國その他、大東亞共榮圏に對する新政策は、今後益々强力に推進さるべきこと。

三、世界情勢の推移に對する正確なる認識把握。

以上の三つである。

これを看ると、日本の外交も大分變つた。明治の末葉から、大正にかけての、日本外交なるものは、先づ第一に日英同盟が、その中心であつたと云ふてもよい。少なくとも、形式的にそうであつた。

其の後、年代と共に、變つたが、英ソ米支と云つた國々が、常に日本外交の重なる相手國である。

この外に、大國としては、獨逸、伊太利等々の國もあつたが、國家的利害の錯綜する國ではなく、外交々渉としては、第二義的であつた。

それが、華府會議を經、國際聯盟時代、滿洲、支那事變と經て、上記の如き國策、外交と變つた。

これは、必ずしも重光氏以外の外相でも、かくあらねばなるまい。

重光氏は以上の項目に對して、さて、どんな具體案を持つてゐるかと云ふと、彼の聲明もきかぬから、解らないが、就任後、人目を牽ひたのは、各國大使の引見である。

外相が新任されると、各國の大公使を引見するのは、どこの國でも、いつでもやる一つの慣例で、大體、儀禮的と云ふてよい。

それを、重光氏は相當有效に活用したらしい。尤も、内容は解らないが、紙上の報告では大

使には一時間乃至一時間半、公使には三十分位、四、五日間に亘つて行はれた。

こうして、彼は、その片鱗を現はした譯けである。が、外相としての及第點迄には、かすに時日を以つてせねばなるまい。

たゞ、こう云ふことは云へる。彼は、霞ケ關の典型的外交官であるから、日本外交の原理は承知してゐるし、支那、ソ聯、英、歐洲等の國情は、今迄の任地の關係上、これもよく知つてゐる。

米國へは赴任したことはきかぬが、米國の土は踏んでゐるし、彼氏のことであるから、知らぬことはない。

先づ、世界の外交に通じてゐると云ふべく、從つて、現時の大戰亂に、如何なる政策を用ゐべきやに就ては、それ〴〵の識見ありと想はれるし、現下、適人者と云ふべきである。

今後の問題は、その識見を、どう運用し、帝國の國運を進展せしむるかにある。思へば、重光氏も、重責を負ふたものである。

× × ×

吾人の重光氏への注文と云ふても、又、別に、特筆大書するものはない。以上の三項目をうまくやつて貰ひたい。所が、一見平凡だと云ふ、この注文が仲々難かしい。故に、益々外相の自重、識見とを望むのである。

然し、政治家の如きもそうだが、殊に、外相の如きは、國民から喝采されることは少なく、非難される方が多い。

だから、重光氏も、この呼吸を心得て、國民から、喝采されなくとも、隱忍自重して、國家の大策を樹立して貰ひたい。否、寧ろ、反對、非難の嵐の中にあつても、毅然として國家の大方針を立てゝ貰ひたい。

重光氏の先輩として、巨歩を外交界に印した陸奥、小村の如きも、その在職中は、必ずしも拍手喝采の日のみつゞかなかつた。

例へば、陸奥の三國干渉の苦杯、小村のポーツマスの媾和の非難の如き、比々皆然りである。

然し、その苦杯たるや、陸奥、小村の外交上の失敗であつたかと云ふに、今日、冷靜な外交史眼をもつてせば、寧ろ、適切なる外交を行ふたと評すべきである。

こんな譯けであるから、一ツ百年後に知己を得る位の覺悟で、働いて貰ひたい。

× × × × × ×

見渡した所、今の世界各國に、戰時の外相として、これぞと云ふ程の人は、見うけない。獨のリツベンドロツプ、英のイーテン、米のハル、ソ聯のモロトフなどは、その重なる人々であるが、この人に萬點を呈すると云ふのは、見當らない。

そこへ、重光氏が、日本の外相として一枚加つた譯けだが、或は、役者は、一枚の上かも知れない。

外交官補から、大、公使、次官とユツクリ順路を踏んで、霞ケ關の主人公となつたのだから焦らず、騷がず、帝國外交の爲めに、東亞共榮圈の爲めに、世界平和の爲めに、御健闘あらんことを祈り、就任の祝辭にかへて置く。妄言多謝。……（終）

筆者紹介――城北散史、――早大政治科卒――東京情報社々員

435
227

本社發行目錄

戰爭製造者を語る　定價十錢 送料四錢
赤都モスクワ　同上
日本海軍論　同上
ユダヤ人の動向　同上
日米抗爭の檢討　同上
英國はどこへ行く　同上
米國の對日反擊論　同上
日本陸軍論　同上
蔣介石はいつ迄戰ふか　同上
軍人宰相論　同上
太平洋上の新戰局　同上
中國の參戰　同上
空軍の重大性　同上
日ソ國交の機微　同上
軍國宰相論　同上

御注文は前金にて、便宜の方法で御送り下さい。

東京市淀橋區諏訪町百十一
東京情報社
振替口座東京一七三、六一〇

出文協承認イ110552號

版權所有

重光葵論
定價十五錢
（送料四錢）

昭和十八年六月一日　印刷
昭和十八年六月十日　發行

著者　城北散史
東京市淀橋區諏訪町一一一番地
發行人　大沼廣喜
東京市小石川區戸崎町九六番地
印刷人　中橋印刷所
東京一三三二
東京市淀橋區諏訪町一一一番地
發行所　東京情報社
振替口座東京一七三、六一〇
日本出版文化協會　會員一二〇〇六〇
東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

元衆議院議員
朝日新聞社々友　神田正雄著

謎の隣邦支那

定價一圓五十錢
送料十六錢

著作は知名の支那通、本書は變轉極りなき支那の虚行を觀察する鍵ともなるべき知識を網羅す。國民性社會組織、政治や經濟に至るまで極く平易に面白く書いたもの、凡ては著者四十餘年の鋭い觀察の賜で、正に一讀すべし。

小林新作著

華僑の研究

定價一圓五十錢
送料十六錢

華僑は日支事變以來我が國人研究の對照である。本書が初めて華僑の研究を遂げて之を體系づけたもので、數百年來の歴史と民族性とを穿つて華僑活躍の實體を見屆けた驚異的研究發表で、必ず一讀すべき好著。

元衆議院議員
朝日新聞社々友　神田正雄著

躍進支那を診る

定價一圓五十錢
送料十六錢

陸軍大將本庄閣下の序文、著者は天下知名の支那通、數十回に及ぶ支那旅行視察を經て、中支、南支の全貌を紀行文に綴つたもの。時局下一讀の値あり。

東京市淀橋區諏訪町一一一
東京情報社
振替口座　東京　一七三、六一〇